

東日本大震災を考える。

監事 加瀬明彦

ゆいまーる生活館の前で、毎日、バタバタと慌ただしく、ゆいまーるにパンを買いに行くゆとりもなく、コーヒーを飲みに行く余裕もなく、ひたすら会計事務所の仕事をしている。趣味は？と聞かれ、仕事と答える。そんな税理士の「加瀬」と申します。

NPO 法人 CES では、いつも土居さんに追い立てられながら、監事の役を務めさせて頂いております。

東日本大震災については、皆さま、いろいろなことを感じ、考えていることと存じます。この度、理事エッセーの当番が回って来たのを機に、私もこの大震災を考えてみたいと思い、とりとめのないお話し、二つほど、筆を執らせて頂きます。

10月の初めに、宮城県の気仙沼を訪問する機会がありました。まずはその時のことからお話しをさせて頂きます。

気仙沼港でバスから降り立った時、一緒に行った仲間一同、呆然とただ立ちすくむばかりでした。なんにも無い。本当にみんな流されて、なんにも有りませんでした。

そして、海からはるかに離れた、なんでこんなところという場所に、大きな船がある。信じられない光景でした。

衝撃的なことばかりでしたが、いちばん印象深く残っていることは、案内をして頂いた地元の方々の言葉です。「甘く見ていた」「たいしたことはないと思っていた」「油断していた」「こうなることが解っていたら・・・」まさに後悔の言葉の連続でした。

自然を克服しているなんて大まちがい。人の傲慢さが作り出した人災か。いつの頃からか、私たちは、自然とうまく付き合う術を忘れてしまっているのではないのでしょうか。日本列島がたいへん厳しい自然環境にあることを、あらためて納得させられ、自然の中における人のあり方について、つくづく考えさせられた気仙沼の一日でした。

ところで、私は、最近まで、資本主義と自由主義が、そろそろ賞味期限が来ているのかなと思っていました。突然の話しの展開、申し訳ありません。実は、東日本大震災がこの賞味期限を伸ばしてくれるのではないかと密かな期待を抱いております。

競争の名のもと、自分の利益になることばかり追求し、思想・言論の自由の名のもと、自分の権利ばかり主張する人の多い社会は、いずれ崩壊する。

今の日本は、ほとんど、この状況にあるのではないのでしょうか。自分のことしか考えていない人が多すぎます。「もうだめかな」と思っていました。しかし、大震災をきっかけに、誰もが「助け合い」や「思いやり」を意識するようになったような気がしています。震災前とは比べものにならない数多くの人が、この意識に気付き、活動を始めています。

人は、「競争」だけでなく、「助け合い」や「思いやり」を手に入れたからこそ、今があるのではないのでしょうか。「支え合う」ことこそが、人の人たる所以である。この大震災は、本当に大切なことは何かを、私たちに知らせてくれたと思っています。

話しがクドクドと長くなって申し訳ありません。年を重ねると、しつこさが増します。お許してください。もし最後までお読み頂ければ、幸いです。今後ともよろしくお願いいたします。